

睡眠医療における看護の役割

尾崎 章子

日本睡眠学会 準機関誌編集委員会 編集委員
東北大学大学院医学系研究科保健学専攻

2026年3月、医道審議会において標榜可能な診療科名に「睡眠障害」を追加することが了承されました。睡眠医療は独立した診療領域として社会的な位置づけを一層明確にしつつあります。もともと睡眠障害は複数の診療科にまたがる領域であり、受診先がわかりにくいという課題が指摘されてきましたが、この制度的変化は、患者の医療アクセスを改善するとともに、睡眠医療の専門性を可視化するものといえます。

こうした流れは、医療体制の変化にとどまらず、その実践を支える看護職に対しても、より高度で体系的な専門性が求められるものと考えられます。睡眠障害は、治療の対象であると同時に、身体状態や心の健康、社会環境などと密接に関連しています。そのため、看護の実践においては、医学的視点に加えて、生活の文脈から理解し支援する視点が不可欠となります。

このような背景のもと、日本睡眠学会では「専門睡眠医療看護師」制度が創設され、本年4月には初めての認定試験が実施されました。本制度は、睡眠に関する医学的知識とともに、生活支援や多職種連携を担う看護職の専門性を明確化し、その育成を目的とするもので、今後の睡眠医療の発展において重要な基盤となるものと考えられます。

本特集「睡眠医療における看護のかかわり」は、こうした問題意識と制度的変化を背景として企画いたしました。また、昨年の学術集会（2025年、広島）において企画されたシンポジウムのなかから、編集委員会において特集テーマとして選ばれたものの1つでもあります。本特集は、領域ごとに分断されがちな睡眠医療の実践を、看護の視点から横断的に捉え直すことを試みています。執筆をお願いした各領域の先生方の原稿を通して、睡眠がいかに多様な文脈のなかで現れ、それぞれの現場でどのように支えられているのかが、改めて浮き彫りになりました。看護は医療と生活をつなぐ存在として、これまで以上に重要な役割を担っていくことが期待されます。

本特集が、睡眠医療における看護の専門性を改めて見つめ直し、それぞれの実践をつなぎ、新たな発展へとつながっていくことを願っております。